第34回日本ジオパーク委員会・第1回調査運営部会合同会議議事録

日時：2018年5月19日(土)　10:00～16:00
場所：幕張メッセ国際会議場202会議室(JGC・調査運営部会会議)
　　幕張メッセ国際会議場201会議室（申請地域プレゼンテーション）
　　幕張メッセ国際会議場202会議室（机上審査）

日本ジオパーク委員会

＜委員長＞

　中田節也　　防災科学技術研究所火山研究推進センター長

＜副委員長＞

　黒田乃生　　筑波大学芸術系教授

＜委員＞五十音順

　池田高世偉　　隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会会長・隠岐の島町長
　大野希一　　島原半島ジオパーク協議会事務局次長
　久保純子　　早稲田大学教育学部教授
　齋藤文紀　　島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター長・教授
　佃　榮吉　　産業技術総合研究所特別顧問
欠　矢ケ崎紀子　　東洋大学国際観光学部教授
　渡辺綱男　　自然環境研究センター上級研究員
　渡辺真人　　産業技術総合研究所地質情報研究部門・ユネスコ世界ジオパークカウンシル委員

調査運営部会

＜調査運営部会長＞

　宮原育子　　宮城学院女子大学現代ビジネス学部長・教授

＜調査運営副部会長＞

　大野希一　　島原半島ジオパーク協議会事務局次長

＜調査運営部会員＞五十音順

　岩本直哉　　銚子市社会教育課文化財ジオパーク室主任学芸員
　柴田伊廣　　文化庁文化財部記念物課文部科学技官
　利光誠一　　産業技術総合研究所地質情報研究部門・総括研究主幹
欠　鳥越寛子　　糸魚川ジオパーク協議会事務局員
　中川和之　　時事通信社解説委員
　中田節也　　防災科学技術研究所火山研究推進センター長

新名阿津子　　伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局選任研究員

長谷川修一　　香川大学創造工学部長・教授

柚洞一央　　鳥取環境大学環境学部環境学科准教授

渡辺真人　　産業技術総合研究所地質情報研究部門・ユネスコ世界ジオパークカウンシル委員

藁谷哲也　　日本大学教授

＜学術アドバイザー＞

伊藤和明　　防災情報機構 NPO 法人会長

〈日本ユネスコ国内委員会＞

秦　絵里　　文部科学省国際統括官付国際統括官補佐（午後欠席）

齋藤　彩　　文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長

＜関係省庁（オブザーバー）＞建制順・省内五十音順

大城久尚　　国土交通省水管理・国土保全局砂防部砂防計画課地震・火山砂防室火山対策係長

三宅里奈　　観光庁観光資源課課長補佐

松平定憲　　環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室係長

＜事務局＞

齊藤清一　　JGN 事務局長

古澤加奈　　JGN 事務局次長

宮﨑博子　　JGN 事務局員

水野恵美子　　JGN 事務局員

＜開会＞

事務局：それでは今から、第 34 回 JGC・第 1 回調査運営部会合同会議を開会します。

日本ジオパーク委員会･調査運営部会は文部科学省平成 30 年度日本/ユネスコパートナーシップ事業の委託を受けて開催しています。本日は委員構成が代わっての初めての会議となることから、最初に委員・調査運営部会員の紹介をいたします。

＜委員紹介＞

事務局：このほか、本日は欠席ですが 1 名委員が就任されています。また調査運営部会員を兼務される方が 3 名いらっしゃいます。調査運営部会員の紹介をいたします。

＜部会員紹介＞

事務局:今日は初めてということで日本ジオパーク委員会の正副委員長並びに調査運営部会の正副会長の選任を行います。

＜日本ジオパーク委員会正副委員長互選＞

事務局：日本ジオパーク委員会会則第 5 条第 2 項の規定により、正副委員長を互選します。正副委員長への

立候補、または推薦はありませんか。

委員：立候補ではなく推薦ですが、委員長にこれまでの実績、副委員長として長年にわたり JGC に携わってこられた中田節也さん、副委員長には地球科学以外の視点が必要との観点から黒田乃生さんを推薦します。

事務局：ほかに、立候補、または推薦はありませんか。ただいま委員長に中田節也さん、副委員長に黒田乃生さんと推薦していただきましたが、これにご異議ありませんか。

一同：異議なし

事務局：ご異議なしと認め、そのように決しました。それでは、正副委員長からご挨拶をいただきます。

委員長：中田です。これまで副委員長をやってきて、初代尾池先生に 10 年間も委員長として日本のジオパークをひっぱってきていただきました。会社の場合は二代目がダメにして、三代目が潰すという話もききますが、改組してきちんとした体制ができましたので、安心して運営できるものと思っております。みなさまの協力が必要です。内容のある会議にしたいと思いますので、宜しくお願いいたします。

委員:筑波大の黒田と申します。文化遺産の方でずっとやってきましたので、非常にアウェイな感じがしつつ、副委員長という大役を仰せつかって緊張しております。至らないところもあるかと思いますが、どうぞ宜しくお願いいたします。

＜調査運営部会正副部会長互選＞

事務局：引き続いて、調査運営部会設置規程第 2 条第 2 項の規定により、正副部会長を互選します。正副部会長への立候補、または推薦はありませんか。

部会員：推薦という形でご提案させていただきたいのですが、部会長に宮原育子さん。長年地理学の視点から審査も携わっていただいているし、女性にこういうポストについてもらうのが大事なことだと思うので。副部会長に大野希一さん。世界の動向を知っている方で適任かと思います。

事務局：ほかに立候補、または推薦はありませんか。それでは、部会長に宮原育子さん、副部会長に大野希一さんとすることにご異議ありませんか。

一同：異議なし

事務局：ご異議なしと認め、そのように決しました。それでは、正副部会長からご挨拶をいただきます。お願いします。

部会長：調査運営部会の部会長を仰せつかりました宮原と申します。JGC の方で 5 年くらい関わらせていただきまして、尾池委員長、中田副委員長、それから JGC のメンバーのみなさんにいろいろ教えていただきながら過ごして参りました。この度 JGC が改組になって調査運営部会という新しい組織がスタートするということで、新しいメンバーのみなさんにもご協力いただき、改組が有効であるという形に向けていろいろ頑張っていきたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

部会員：副部会長を仰せつかりました大野と申します。ジオパークを運営する立場でジオパークの活動に関わり、こうして審査に入っておりますので、現場の声と、メンバーがよりよく動くためにどうやって行ったらいいか、部会のみなさんと実のあるディスカッションをしたいと思います。その成果を委員会のほうへ持ち帰ってきて、正しい審査が行えるよう手助け、サポートしていきたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願いいたします。

事務局：ここからは、日本ジオパーク委員会会則第 7 条の規定により、委員長に議長をお願いします。

委員長：最初に、資料確認を事務局からお願いします。

＜事務局説明、資料確認＞

委員長：それでは、議事次第により会議を進めます。3.経過報告、4.委員会の任務、5.調査運営部会の任務について、確認したいと思います。

＜経過報告＞

＜委員会の任務＞

＜調査運営部会の任務＞

＜資料を見ながら説明＞

部会長：組織図の中で事務局の体制(位置づけ)はどのようになっているのか。

事務局：委員会の会則資料 2 を参照。委員会の事務局については第 11 条で委員会の処理をするために事務局を置くとなっている。委員会の事務局は委員長が委員会に諮って決定することになっている。2015 年 4 月から委員会の事務局は JGN が執り行っている。その時からずっと JGN が事務局となっている。図にはあえて表記はしていない。

委員長：審査過程については事務局からお願いします。

＜事務局説明＞

委員長：ただいまの報告にご質問等はありませんか。

一同：なし

＜審査方針の確認＞

委員長：資料 7 は前回の委員会で認めた基準ですでに決めたものです。

＜委員長説明＞

委員長：(修正点に関して)修正お願いします。基本的にはここで認めたことにして、最終決定はメールで再度確認とする。

現地審査は最低丸 2 日必要ということをここで決定し、それを含めてここまでの所は案の通りでよろしいか。問題が無ければ承認したい。

一同：異議なし

＜現地審査員の確認＞

＜委員長説明＞

部会員：これまで審査員は、現地とやり取りする事務担当を調査員の方にやっていただくことが多かった。今後は連絡役をどうするか。

委員長：3 人が集まってみないと役割分担が分からない。そこで決めるということで。これで問題なければ今年はこのようにしたいがよろしいか。

事務局：質問に関連して。戻って恐縮だが資料 8 の審査方法について、現地審査員は３人で協力し現地との調整審査及び現地報告書を作成するとある。これまで JGC の委員と JGN の地域のほうで構成された現地審査員３名が現地審査を行った場合は、主に JGN のどこかの地域の審査員が中心になって報告書の素案を作成したり、ケースバイケースだがそういうのも含めて今後は 3 人で調整、協力して進めていただく案で書いている。

＜その他、午後の予定確認＞（プレゼンテーション、机上審査について）

【机上審査】

＜申請地域現地審査の可否決定＞

委員長：申請地域現地審査の可否決定、プレゼンを聞いて審査に出向くかどうかという判断です。その辺を議論いただきたい。利害関係者がいるので、その方は議論に加わらないでください。まず土佐清水ついて、プレゼンを聞いた印象を審査員中心に発言していただき、現地審査可否のご意見をください。

＜土佐清水について＞

部会員：私は行った方がいいと思う。何度か質問してみたが、去年行ったときにガイド等が足摺岬について語っている内容と、今日聞いた内容とでずいぶん違いがある。現場感覚としてもう少し分かりやすく説明しているのではないか。その辺をもう少し確認したい。プロジェクトチームも動いているようだが、その状況も今日の説明だと十分に伝わってなかったので、状況を確認したいと思っている。また学校等の動きもよく分からなかったので、現地に行って教員の状況についても確認した方がいいのではと考えている。

部会員：プレゼンの場のことだけでは結論は出せない。現状どう悩み、何が足りないと思っているのかということは今後の伸び代になると思う。認定するにしろ、そうでないにしろ、これからの土佐清水のジオパークとしての方向性を決めることになるので、必要な情報を審査結果報告書で伝えていくためにも現地へ行くべき。

部会員：お二方は現地に行って確認した方がいいとの意見で私も同感。プレゼンというのは短いし、申請書も十分に書けていない気がする。実際に実態を見なくてはいけないと感じている。

委員長：いずれにしろ行く方向で考えた方がよい。

部会員：土佐清水の質問としても出たが、地形と地質の関係。説明は地質のことを専門に話をされていたが、例えば竜串の地形について、地質だけで地形が出来上がっているわけではなく、砂泥の互層が出来上がったあと風化浸食を受けてああいう地形が出来上がっている。地形についてどういう認識を持っているのか。地質イコール地層、化石だと思っているのではないか。萩についても同様に感じた。現地ではどう考えているのか。

委員長：ぜひ直接、意見交換をしていただけたらと思う。

部会員：地形の話は私も大事だと思っている。岬という地名に関してはストンと話が抜け落ちていてまだまだ足りない。現地でガイドさんがどのように説明しているのかがポイントかと思う。

部会員：付け加えると、申請書に風化構造という言葉が出てくる。風化構造という言葉は一般にはない。風化核の構造なら分かる。風化構造と書いてある意味は風化景観ということだと思うが、地形と地質の切り分けの関連性が曖昧、ごっちゃになっているという気がする。

学術アドバイザー：現地に行くなら、子どもたちに対して防災学習をどれだけやっているかを調べていただきたい。南海トラフ地震が切迫している。最大 30 年以内に 80%と言われているが、起きるとすれば 2030 年代後半ぐらいに危険期に入る。今の小中学生が社会人になった頃に起きる可能性があるので、子どもたちに対する防災教育をどれだけ進めているかをぜひ見てほしい。

部会員：学校教育としてではなく、ジオパークとしてどういったやり方をしているか。

部会員：自然をできるだけ残す、人工物は作らないことを選択したと市長が言っていた。どういうことをやっていくのか。ある意味日本中のジオパークの参考になるかも知れないので、きちんと聞き取りをしたい。

部会員：南海トラフだけではなくて高知西南豪雨災害の教訓をどう伝えているか、どう学習しているのか聞いてきたい。

部会員：活用の面で、持続可能な開発の所で、その概念の理解ができているか。SDGs の取り組みに合わせたようなことを理解してやっているのか。

部会員：どう考えているか聞いてきたい。どこまで出来ているかということを過剰に問うわけではない。考えていることに意義があると思う。

部会員：ステイクホルダーとのつきあい方、どういう風に地域の人と付き合っているのか。コミュニケーションはとっているのか聞いてほしい。

部会員：それはどうやればいいのか。

部会員：さっきのプロジェクトチームもそうだが、どういう人たちが出てきたのか少しは見せてくれたが、ほかにどういう人がいるのか。できるだけ審査の中でもそういう方にたくさん来ていただいてお話を聞きたいとこちらからリクエストする。逆に言えば、どういう人をステイクホルダーにしているのかが分かる。

部会員：世界ジオパークの審査の流れで、ビジビリティとパートナーシップ協定が流行っているが。

部会員：それは今の協議会形式はどうかということか。

部会員：つながりの可視化をどうするかということ。

部会員：連携、どうやったら実態を伴うのかというところは、ジオパークだけではなく学術機関の連携でもある。協定さえあればということで言われるが。

部会員：協定を結んだら終わりというわけではない。

部会員：そういったところも我々の眼力が問われる。

部会員：裏付けを見ながら実態はどういうことかを確認してきたい。

委員：SDGs は大事だと思っている。スタートラインのところで世界ジオパークがどういうことを問題としているか。環境問題、防災問題、そこが全く無関係でないということは地域の人に理解してもらいたい。審査に行った人が発言した方が地域にも理解していただける。

委員長：それは土佐清水に限った話ではない。

委員：土佐清水は足摺岬や竜串が国立公園になっていて、その国立公園の中でも最重要拠点と位置づけられる場所。いろんな意味で施設が老朽化し、観光入り込みがかなり下がってきている。それに対し、地元にしかない資源を生かしてどうやって新しく事業を展開していくかが大事な検討課題。環境省含めて地域が議論をしている真っ最中で、その流れの中でビジターセンターを建てようということになっている。国立公園へのいい利用を展開していく地元の議論と、ジオパークの議論がうまく結びつくといい。プレゼンでは国立公園とジオパークの結びつきが出なかった。

部会員：地元ではすごく力を入れていると聞こえてきている。

委員：国立公園の方もジオパークの展開が新たに目指すべき方向だと思うので、いい連携ができるといい。竜串にある水族館も建て替えの方向。公共施設は再整備の方向に向いているが、民間のお土産屋、旅館はつぶれて廃墟のまま。どう再生していくかが地域にとっては重要課題。

部会員：経済活性化の部分も、あまり言いたくないが「ひとづくり」でひとくくりに締めくくっている印象があり、どうするのか気になっている。

委員：ジオパークがきっかけで動き出すと良い。

部会員：去年現地審査に行かなくていいと判断した理由は、申請書に文化的なもの生態的なものに関するリストが無かったから。運営する人達が地域に何があってどんな価値をもっているか分かっていないという状態は、そもそもジオパークとしてあり得ない。ガバナンスもこのままちゃんとやっていけるのか。いろいろな地域に早い段階から顔を出し情報収集しているわりには、それが全然事業に反映されない。何のために他の

ジオパークへ話を聞きに行っているのか。もう1回作り直して出てきて欲しいという気持ちもある。それが今回のプレゼンにある背景の独特の空気感と感じた。現地に行ってガイドさんにも話をしてきたが、なかなか話が通じない地域だった。人から言われたことをそのまま出してしまい、深い背景を理解してくれない。表面的な理解で何とかやりくりしようとするきらいがある。プロジェクトチームが出来て動き出したのはいいが、活動の実態がよく分からない。9か月に13回で結構やっているなと思ったら、3つの課題を同時並行にやっているので実は3か月に1回しか集まっていなかったとか。ジオ弁の話も出て、何か新しいものをゼロから作り出すのも大事だが、元々地域にあるものをどうやって価値として見直してジオとつなげていくかが見えない。ジオ弁を作ったから地域振興ではない。その場所にあるものをどうやって価値付けしてくか取り組みが弱い。

部会員：ジオ弁の話だが、今日のプレゼンでもプロジェクトチームの話がキーワードで出ていたが、保全のための何かをやっていますとか、他にもやっていることがあるはずなのでその辺を確認したい。

部会員：土佐清水で特産になっている宗田鰹の価値づけ、意味づけをもっときちんとやらないと。地元にあるものを使って出したからジオ弁ですと言われても悲しい。元々地域にあるものの評価してほしい。ジオ弁を否定するわけではないが、素材に関する価値づけをどのくらいやっているのか。

部会員：スタートのきっかけとしてはいいかも知れない。もっと何をやりたいか聞いてきたい。

部会員：なかなかこちらの意思が伝わらない。彼らも一生懸命だが、自分達ではどうしてよいかわからない

委員：土佐清水のWebサイトは面白いと思った。写真もきれいだし、楽しそうだ。素敵なものがいっぱいある。花崗岩の石がゴロゴロしている写真もある。

委員長：花崗岩の説明は学問的に難しいのだが、難しいなりに説明の仕方があるはず。それが聞かれなかった。

委員：ほかの委員が質問していたように文化的な裏付けが弱いと思う。ほぼ未指定である。震災碑もせめて市指定の史跡とか、前向きな文化遺産とジオをつなげる手立てをしないのか。ジオと地形、地質とそこから出た文化はもっと沢山あるはず。それを探す活動を是非していただきたい。椿も文化遺産、文化的景観なのでつながるところを是非見せて欲しい。現地に行って公正に見てきて欲しい。

委員：はじめてヒアリングを聞いて、思っていたジオパークのイメージと違って、geologyの内容が少ないと感じた。土佐清水はどこが地質的に面白いかほとんど分からなかった。萩の方はgeologyを端的に示していた。地形と地質で地形が弱いというご指摘もあったが、地質的なところも少し必要な気がする。

委員長：申請書で地質のほうはすごく詳しいが、ポイントが分からない。

部会員：3点ここは重要なんですという記述はあるが、そこへたどり着くまでに全部読まないといけない。

委員：楽しかったが、反面大変だなと。一点だけ、土佐清水はプロジェクトのあり方が2018年3月で終わっているような気がした。あれだけプロジェクトを大事に今後育てていくと言っていたが、意見を聞くと3月で終わっているのではないかと疑念がある。

部会員：次に何をするかが見えてこない。

委員：そこに生活している人たちとジオとの関わり、文化というものはものすごく歴史があって、地名に残っていたり人の名前に残っていたりとかあると思う。そこが地に足のついた状態になることが非常に大事なところ。住民たちがあそこの水はどういう歴史があるかを理解していて、もしかしたら名前を付けている人がいるかもしれないし、市長の泥谷というお名前も非常にジオ的。確かな理由があってその名前になっていると思う。それが入りやすい。そうすると、住民の人たちもあの裏山が関係あるとか入りやすくなると思うのだが。

部会員：今言われたのは、おそらく粘板岩があるんですよね。白滝山は花崗岩だな、とかそういう地名がある

が、そういった話はまったくなかった。

部会員：そのあたりの関連性は昨年度 JGC から出した報告書の冒頭に書いてある。足摺の地名の由来だとか。なぜあそこに清水という地名が付いているのか、色々説はあるが。そういったところの切り込みをしてほしいのだが。

部会員：土佐清水の申請書を読むと地質学概論が冒頭書かれていて、ストーリーがつながっていない地質の記述がぽんぽんぽんと出てくる。おそらくそういうのを考えるのがプロジェクトチームで、とにかく取ってだしのものが並んでいる。

部会員：プロジェクトチーム、環境省のレンジャーが異動すると縮小化する可能性もある。

部会員：現地でレンジャーと話したが、彼が椿のストーリーを作った。

部会員：どなたか 2 年連続同じような難しい話を言っていたとおっしゃった。学識委員と事務局のコミュニケーションがどうなのか。

部会員：去年と同じやり取りをした。反省はされていたがコミュニケーション不足はある。現地で確認するが、今回の地質学的な説明はいろんな専門家や専門員等がきちんとディスカッションして辿り着いたものではない。前回のものをブラッシュアップした程度のように感じる。

部会員：計画の作成過程について、もっと地域のボトムアップの話が出てくるかと思ったらそうでもなかった。

部会員：事務局の方から働きかけて専門家と密に連絡を取り合うということが出来ていないと思われる。

部会員：地形地質ばかりだったので、いろいろな人からいろいろな話を聞き、多面的な視点で地域の人と関わるように伝えた。今回はプレゼンでそれを言わないように意識したら、かえってぼやけてしまったということではないか。

委員長：ここまで、現地へ行くことを前提に話をしてきた。現地へ行くということでよろしいか。

一同：異議なし

＜萩について＞

部会長：前回の審査では、拠点施設がジオパークとしての整備が弱く、可視性の部分で案内解説版が未整備。学術的な支援をされていた永尾先生が亡くなった。ジオサイトのセッティングは永尾先生の研究が一番のメインになっていて、その辺がどうなるのかが懸念される。また萩の場合、地域住民の人たちの活動のメインは「まちじゅう博物館」という、非常に完成された活動が街全体に大変広がっており、なぜその上でジオパークをやるのかというところが説明ではピンとこなかった。前回は「まちじゅう博物館」のガイドさんが話をされていたが、ジオパークとして不自然な部分があった。ただ今回のプレゼンを聞くと 2 年間かなりテコ入れをしてきていて、今日のプレゼンでもなぜジオパークなのかということをはっきりと言ってくれたし、何より阿武町がジオパークのエリアに入り、阿武町自体がジオパークの価値を自分の町とジオパークの関係として明快に語ってくれたのが非常によかった。看板もずいぶん整備したと報告書にも書いてある。そういった可視化をどのようにしてきたか、地域の皆さんそれぞれのジオパークとしての活動を改めてどのようにできたかを見たい。

部会員：組織体制の整理とか、阿武町周辺と山口市阿東地域、萩だけではないところも参加しているということはよかったと思う。体制図で弱いところがあり、現場で確認したい。行く方向で考えるべき。

部会員：保全の話があまりなかったように思う。自己採点でも評価点が低かった。可視性もそうだった。これについての話はプレゼンではなかった。現地で確認して欲しい。

部会員：山口市の取り組みに温度差があることは仕方がないと思うが、将来的にはどのように埋めていくのか。

山口市がどのくらいジオパーク活動を理解しているのか。

部会員：城下町というキーワードは出てきたが、その扱いが雑だった。全体のストーリーで城下町はどう位置付けられているのか、どのように説明するのかチェックしていただければ。

部会長：前回行ったときは城下町の石橋の種類が違う、格の高い武士が使用する（橋の）火山の石と下々の者が使うものとは違うという話だった。そこはかなり意識してその城下町を（ストーリーに）位置付けようとする動きはあると思う。

委員：山口市の関わりで、活動としての一体感がどのように形成されているのか。隣に Mine 秋吉台がある。同じ県内に 2 つ並んでいて相乗効果があるといいと思うが。その辺の関わり合いは生まれているのか。

部会長：Mine 秋吉台とは隣同士ということもあり、素材はそれぞれ違うがジオパーク同士として協力関係である。山口県の中で 2 つジオパークができることになるので、前回の時もかなり色々なヘルプ、アドバイスをしてもらったりしている。今日名前が出ていた長門市も入ってくるとジオパークとして非常に面白くなるということで、今回は間に合わなかったが、将来的には長門市も含めたエリア、Mine 秋吉台の方とも広域的にジオパークで連携していきたいという話は以前から聞いている。

委員長：構想には書いてあった？

部会長：書いてはいなかった。

部会員：ジオプランナー、ジオガイド、ジオマスターなどの関係性や役割、あえて分けているのだと思うが、どうなっているか確認してきていただきたい。

委員：萩は文化遺産では有名な場所。世界遺産に認定された時も驚いたが、今回はジオパーク認定を目指すという。世界遺産もジオパークもユネスコ関連なので、この中でうまく世界遺産を使って連携すれば良いが、具体的にはどうすれば良いか、萩でいい例を見せて欲しい。いろいろな制度があふれているが、ただがめつく使うだけでないのか。ちょっとエリアが広いので、先ほどの様子だと、世界遺産は旧萩市街地だけで複数市町村では使えないから今度はジオパーク、みたいなシナリオだった。せっかくなら両方のいいところを全体で盛り立てていくような活動にしてほしい。つながるところを萩が見せると他の地域の参考になる。「まちじゅう博物館」の活動があるのはすごく良い。ジオによって活性化するように。

部会員：報告書にはそのオーバーラッピングについても書かなければいけない。

委員：個人的興味に近いが、日本海側にあるジオパークは隠岐も島根半島も、厳しい日本海の冬の自然によって地形的に波蝕の厳しいところで、露頭が非常に素晴らしい。その間の風よけの地形があって、港が出来てそこに文化ができた。多くの所もそうだが、萩の人たちはその文化を含めて日本海側でつながっている位置づけを自分たちでどう捉えているのか。明治維新だけではない地形や場所を利用した長い歴史があるわけで。そういうことを日本海の一員としてどう見ているのか。

学術アドバイザー：阿武火山群というのは日本列島の中では重要な位置づけだが、それはどのようにしてできたかということも含めて、ここは伊豆半島の大室山をはじめとする単成火山群と双璧をなす。どのようにして単成火山群が出来たのか、それを含めて聞いてほしい。

部会員：申請書にはスラブ・ウィンドウの説明がしてある。いわゆる端の所で。

委員長：現象はそうだが、日本海側は全部そう。九州、壱岐もそう。それは難しい問題で、どう分かりやすく説明しているか。地層の説明はわかりやすいがあまり詳しくはない。「日本の形成を連続的にとらえる火成活動」とあって、後ろの方で「一億年の中の三回のマグマ活動」とか書いてある。連続じゃないのかと気になるところがあった。

部会員：Skype ミーティングでいろんなジオパークがつながってるとは思うが、伊豆半島、阿蘇の火砕流など

地質的につながりがあると思うので、ミーティングする際ジオのつながりをどうやって意識してやっていくのか。双方的に仕掛けていくのか。ジオ面でのつながりをせっかくなので見せて欲しい。

委員長：いずれにしろ萩は審査に行くということでよろしいか。

一同：異議なし

＜ユネスコ世界ジオパーク再審査地域の確認＞

委員長：ユネスコ世界ジオパーク再審査地域の確認について、洞爺湖有珠山、室戸、アポイ岳。再審査をする地域の現状について説明をお願いします。

＜洞爺湖有珠山の課題＞

委員：ユネスコ審査でイエローだったということで、きちんと対応できていないとよろしくない。いくつか勧告は出ているが、その1番目で常勤の地球科学の職員が必要だと指摘されている。実は昨年も採用しようとしたが、待遇面で折り合いがつかなかったり適当な人がいなかったり採用に至らなかった。そのまま審査を迎えてしまったのが問題。他には運営計画が改定されていないとか、ジオパークに入ってくる道路、駅の入り口のジオパークの表示。昔から指摘されてるのに改善されていない。それもあってかなり厳しい判定になった。そこのネガティブなところが対応出来ているかどうか見てくる。

＜室戸の課題＞

委員：前回の課題は、なにもかも全部ジオサイトとしていたこと。きちんとジオサイト、生態系、文化財とそれを仕分けしたはず。岬の地元の人たちのガイドツアーが非常に流行っている。年間1万人近くコンスタントに案内しているが、海岸以外のサイトが使われていない。これが室戸市としても課題で、海岸でやっているツアーで別の町に宿泊してしまうから地元にお金が落ちない。内陸にあるサイトも活用してくださいと。その辺を今やっているはずなので見てきて欲しい。海岸のサイトだけで帰ってしまうので、内陸部のサイトも使って滞在を。

＜アポイ岳の課題＞

委員：世界ジオパークになって4年経ったが、住民は何も得していないと思っている。かんらん岩を多用しすぎている。他のジオサイトも使ってほしいというのが現地に行った専門家の印象。かんらん岩が大事なことはよく分かるし、そこが売りでもあるが、どうしてもかんらん岩関連サイトばかりを回ってしまう。地質学者的には面白いが、学者以外が行ってこれが分かるのかと。ビジターセンターもちゃんとある。その辺は特に問題はない。

委員：一番メインの登山ルートでは高山植物を説明していて、むしろかんらん岩とあまり言わないことを私は気にしていた。もっと面白く説明ができるんじゃないかと思って。ルートを歩きながら、未だに人類が到達していない地下10何キロ、20キロのマントルが見えますとか、そのすごさを分かりやすく。「ここは地下20キロ、25キロくらいですね。普通は絶対に行けませんけど、ここでなら見られます。」と説明してくれれば喜ぶ人もいるだろうし、レルゾライトとか専門用語を言わなくてもいい。あまりにも科学的、厳密的に説明したがる。嘘のない範囲で、地下何10キロまでここを歩けば行けます！くらいのことを言ってほしい。その辺がどこまで工夫されているか。

委員：山を案内する植物ガイドは、基本的にこれは何とかあれは何とか名前を言うのが多い。中々語れるガイ

ドにならない。
部会員：一方保全をするガイドはこれが大事大事とか言う。少しずつは変わってきてはいる。
委員長：この 3 つの再審査がこの夏にある。担当者はそれぞれ先ほどの事項の調査をお願いします。
世界再審査が山陰海岸、阿蘇である。これについては JGC が必ず審査に同行するということになっている。委員会が誰に行ってもらうと言う形を決めるのではなく、現地の要請に基づいて都合の合う人が行くという形にしたい。よろしいか。
部会員：今回から変わったのではなく、ちゃんと規定をして JGC が決めたということか。
委員長：JGC で決めた。世界的には（地域からの）要望があればという形にしかしていない。前回の洞爺湖有珠山は誰も行かなくてイエローになってしまった。日本の体制の説明不足も反映してるかもしれないということで、JGC としては必ず同行するということになった。

＜現地審査での対応＞
＜事務局説明＞　審査に係る倫理に関する申し合わせを説明。
委員長：高価なものとはどのくらいなのか。
事務局：これまでの例では 3 万円。そのほか審査地域から後日送られてきたお菓子など。
部会員：現地審査での、現地審査員への苦情を聞く、ヒアリングをする委員会としての効率的な案があれば。
事務局：JGC ではなく JGN として対応する話であったかと。
部会員：JGC としても行いたい。
委員長：継続審議ということで。

＜アクションプランの取り扱いと今回の審議内容について＞
委員長：アクションプランをどう扱うか。
事務局：審査が終わった地域へ JGC から審査結果報告書を発出し、それに対して各地域から 3 月末までの締め切りでアクションプランを一旦提出することとしていた。昨年の再審査分に関しては遅れて届いているものもある。現在は前任の JGC 委員にしか共有していない。その引継ぎについてはどうしたらよいか。
委員長：基本的には審査に行った審査員が確認するということで、その結果どうであったかを委員会に上げてもらう。
部会員：現在委員ではなくなっている方もいるので、去年の分に関してはそこから上げてもらうしかない。
委員長：調査運営部会にアクションプランを回してもらう。
部会員：現在委員ではない方々にも問題ないか確認する。結果報告書を発出してそれに基づいてアクションプランを受け取るのだが、アクションプランが出たままで放置すると、そのプランで 4 年間地域が動くことになる。内容がおかしければ提出された段階で指摘しようと以前 JGC で議論した。
委員長：今日の審議で感じたことだが、基本的にプレゼンで審査に行く方が質問していたが、他の方ももっと質問した方がよい。時間がないことは分かってはいるが。時間の 2/3 は行く方が質問して、1/3 はそのほかの委員が質問するなど。
部会員：第一質問時間、第二質問時間というようにしたらどうか。
部会員：今回は、全体的に現場で聞きたいことが多かったのでは。
部会員：中々難しい。
部会長：私たちは申請書を見ているが、同席していたほかのジオパークの人たちは見ていない。改めてあの場

で表明することはとても大事。今回はベーシックな質問になってしまったかもしれないが、逆に細かいことは現地に行ってそれを背景にしてお話を伺うということで確認すればよい。

部会員：私もそう思う。ジオパークを支えてる人の中でどう考えてるのか言ってもらうのが、私たちが結論を出した背景的事情を分かってもらう人たちを増やすことにもなる。

部会員：ちなみに萩に関しては（申請書が JGN の ML で周知されていたので）みんなに読んできてもらった。それを受けて本質的・直接的なプレゼン方法を彼らは行ったので、もう少し挑戦的な質問があってもよかった。

部会長：質問は調査に行く方だけでなくて、委員の方からも色々出てくるほうがよい。

委員長：短い中でどうやるのか難しい。

＜議事録の確定、今後の予定そのほか＞

事務局：資料 13 の前回議事録（第 33 回 JGC）の確定をしていただきたい。前任の委員方には確認済み。

委員長：確定したいと思う。承認してよろしいか。

一同：承認

事務局：現地に赴かれる審査員についてはこの会議後、秋の再審査を含めて現地にお伝えする。審査に行かれる皆様に現地からアプローチがあるがよろしいか。

一同：了承

部会員：現地審査の中で自己評価票をチェックするという話があったが、あれはすごく時間が掛かる。審査日程は 2 日と聞いているが終わらない。それを見越した日程にしてほしい。

委員長：長時間どうもありがとうございました。

終了